
異世界にとばされて 商會に就職する話

シンクレア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にとばされて 商會に就職する話

【Nコード】

N7997X

【作者名】

シンクレア

【あらすじ】

よく分からない理由から異世界にとばされた主人公長門玖朗。

特にチートも無く旅人として生きる最低限の技術だけ・・・と思ったら『言語能力』って結構使える？

この話はそんな主人公がある商會に就職して頑張る話です。

ブローグ

・・・・・・・・どこだここ？

俺こと長門玖郎ながとくろうは困惑していた。

考えてみて欲しい。夜普通に布団で寝たのに目が覚めたら森の中、しかも服装はファンタジーな感じで荷物は大きなりユック？に剣が一振り。これで困惑しない奴がいるならぜひ会ってみたいものだ。

・・・・・・・・とりあえず荷物を調べよう。何か手掛かりが見つかる
だろ。

えっと、とりあえず剣　ブロードソードってやつか？安物っぽい
な　に、懐に巾着袋、中身は・・・・えっと、大きい金貨が1枚、
小さい金貨が3枚、大きい銀貨が22枚、小さい銀貨が8枚、大き
い銅貨が14枚、小さい銅貨が27枚か。どれぐらい価値があるん
だろ。

後はでかいリユックだけだな。えっと・・・・！手紙だ！！

なにになに？

おめでとうございます長門玖朗さん。貴方はこの度行われた異
世界トリップあみだくじ（参加者は日本を中心に集められた異世界
トリップの知識のある青少年1000万人）にて見事異世界トリッ
プ権を勝ち取られました。ファンタジーあふれる異世界をお楽しみ
ください

・・・なんだこれは。

確かに俺は異世界物のネット小説は好きだが・・・ってファンタジー世界って事は危険が盛りだくさんだろ！？何かチートなスキルは無いのか！？

この世界について説明します。まず、この世界には名前はありません（他の世界の存在が確認されていないからです）。貴方が今いる場所はグノーシア大陸のセイムというそれなりに大きい国です。この世界はファンタジーな世界のため、大国であっても魔物や盗賊が多いので注意しましょう

ああもう、それより生きるのに必要な能力だよ！

次に貴方に与えられた物について説明します。

まず安物のブロードソードです。これはあくまで自衛用なので冒険者になるのであればもっと質の良い物を手に入れましょう。

次にお金ですが、金額はランダムに決定されます。この世界のお金の単位はルドで、貨幣は1ルド十分銅貨、10ルド銅貨、百ルド十分銀貨、千ルド銀貨、一万ルド金貨、十万ルド金貨、一千万ルド晶貨があります。1ルドは10円ほどと考えて下さい。

他にリュックサックには保存食、火打ち石、毛布、ロープなど旅に必要な物が入っています。

最後に貴方に与えられた能力について説明します。

まず、この世界のあらゆる言語の会話と読み書きができます。これには古代の言語や異種族の言語も含まれます。

次に、身体能力が上がっています。具体的にはこの世界の平均的な旅人よりは少し上ぐらいですので、旅をする上で体力が問題になる事はありません。

次に、旅人としての技術です。火打ち石の使い方や料理、簡単な狩や自衛の為の武器の使い方などが含まれています。

最後に、剣や魔法の才能はまあまあのので、ちゃんとした師に十年間ならえばどちらも一流にはなれます。
では、異世界での新しい人生をお楽しみください

……どうしろと？

師匠を見付けて剣か魔法を習う？無理だ、そもそも命懸けの仕事なんてしたくない。

……だからといって俺にできる仕事なんて……ん？

『あらゆる言語の読み書きができる』

……これだ〜！！

この世界にいくつ言語があるか知らないが通訳や翻訳を仕事にできる！……って何が喋れるかなんとなく分かるな。え〜と、大陸共通語、北方訛り、東方訛り、西方訛り、教会語、古代語、精霊語、巨人語、竜語、森妖精語、土妖精語、草妖精語、水妖精語、空妖精語、妖魔語……まだまだある。十分仕事になりそうだな。

そうと決まったら善は急げだ。幸い地図は入ってたし太陽を使った方角の読み方も分かるようになった。

この近くに大きい町があるっばいからな、魔物や盗賊に会う前にレッツ・ゴーだ！

第1話：出会い

「・・・結構旨いな」

何が旨いのかと言うと荷物に入っていた保存食だ。固いパンと干し肉だが火で炙って挟んだらかなり旨い。

あれから俺は地図に従って一番近くにある町に向かっていた。小さい村ならもつと近くにあったが、町からは離れる方向だったので少歩く事を覚悟で町の方角を選んだ。

どうやら身体能力はちゃんと強化されているようで、重い荷物を持って夜まで5時間歩いても少し疲れた程度だ。

ちなみに現在時刻は大体6時ぐらいだから俺がこの世界に来たのは1時ぐらいだと思われる。

で、そろそろ夜になって暗くなるので道にあった野営スペース（旅人や商人の為に数キ口おきに簡単に木を切り倒して作った広場）で食事をして野営の準備をしているところだ。

食事を終えて少し経った頃に二台の馬車が広場に入ってきた。一台はなかなか高そうな、もう一台は安物にぼろ布をかけたような馬車だ。護衛と思われる武装したごつい男が四人馬に乗って付いてきている。

馬車は広場に入って直ぐに止まり、高級馬車から何人が降りてきた。高そうな服装の30代の男、一段劣る、それでも安物ではない服を

着た20代の男、そして使用人風の若い女性が二人。

「おや、先客ですか。大人数ですいませんね」

男が言った。細身で目の鋭いやり手のビジネスマンに見える男だ。

「いえ、みんなの為のスペースですから」

「はは、ありがとうございます。お隣よろしいですか？」

「……構いませんよ」

どういっつもりだ？

「どうも。……どっこいしょっと。ああ、お前達は野営と食事の準備をしてくれる。私はこの人と話してるから」

野営の準備をしなくていいぐらいには偉いらしい。それにしても俺に何の用だ？

「私の名前はエンリコ・レスキリアン、商人だ。君は？」

「クロウ・ナガト、いまのところは旅人です」

「……どこの出身だね？」

「この国のド田舎の村ですけど。なんですか？それになんて俺と話を？」

出身については歩いている間に考えた。田舎の村の出身、父は昔ど

こかの町で語学を学んでいたが、ある理由で隠居、俺は父に教わったので色々な言語を喋れる。田舎育ちなので世間知らず。そんな設定だ。

「いや、随分と綺麗な大陸共通語だったのでね。この辺の田舎なら基本的には東方訛りだから。後、話しかけた理由は簡単だ。旅人は面白い情報を持っている事があるからだよ」

「なるほど。俺の言葉が大陸共通語なのは父に習ったからです。父は昔色々な言語を学んでいたらしくて、俺も父に習ったんです。東方訛りの方がいいですか？」

「いや、むしろ大陸共通語の方がありがたい。貴族やある程度の規模の商人は基本的に大陸共通語を使うからね」

今地味に「自分は貴族に並ぶ大商人だ」って自慢したなこの男。

「しかし、色々な言語と言うがどのような言葉を活せるのかな？」

「大陸共通語と訛り3つ、後亜人の言葉を幾つか。読み書きも出来ます」

本当は亜人の言葉もほぼ全部（もしかしたらほぼじゃなく全部）話せるけどさすがにそう言ったら怪しまれるだろうからな。

「それは凄い！じゃあ、エルフ森妖精語とフェザーフォルク空妖精語とフェアリー竜語と精霊語の内の幾つを活せるのかな？」

「全部大丈夫ですけど・・・」

「全部!?!?!? クロウ君!?!」

「な、何ですか?」

「私の商会で働かないかい!?!」

「.....は?」

「.....え、え~~~~!?!? な、何ですかいきなり!?!」

「君の語学力は十分即戦力だからだよ。それとも君は冒険者になるつもりだったのかい?」

「い、いえ、町に着いたらこの語学力を役に立てられる仕事を探そうかと考えてましたけど.....」

さすがに十年間修行してまで冒険者になりたいとは思わない。今のままじゃ即死だろうし。

「ならちようどいいじゃないか。レスキリアン商会はこれでも結構な規模だ、就職先としてはかなり優良だし、君なら間違いなく活躍出来る」

「い、いや、いきなり言われてもちょっと決められませんよ。そもそもエンリコさんが何を商っているのかも聞いてないのに」

「ん? ああ、言っただけで無かったな.....これだよ」

エンリコさんは立ち上がって例の安物の馬車のぼろ布を取った。中は.....まるごと檻だ。

「えっと・・・檻、ですか？」

さすがにそれは無いよな。

「いや、これから仕入れるんだ。何だか分かるかな？」

「・・・珍しい動物とか？」

「・・・」

「・・・」

「・・・プツ」

「笑わないで下さいよ」

むっっちゃ笑いを堪えてやがる。

「クツクツク・・・いや、予想外の答えだったのでね。まあ、完全に間違っただけじゃないかもしれないが」

「・・・結局何なんですか？」

「ふふ、私の商品は・・・」

商品は？

「
奴隷だよ
」

第1話・出会い（後書き）

短くてすみません。

奴隷の設定の説明が長くなるかもしれないのでここで切ります。

第2話：奴隸制度

「ど、奴隸ですか？」

急にこの人が悪人に見えてきた……。それともこの世界じゃ奴隸は普通の事なのか？

「ああ、奴隸商だよ。・・・そうか、君は田舎の出身だったね。奴隸の事は全然知らないのかな？」

「ええ、ほとんど。教えていただけますか？」

どこまで偏りの無い話をしてくれるかは分からないけど、とりあえず奴隸に関する情報が少なすぎるからな。

「かまわないよ。まず、奴隸には大きく分けて3種類ある。

1つ目は金銭奴隸、正式には第一位奴隸だが、借金のかたや貧しい家で親に売られたりして奴隸になった連中だ。これはほとんど一般人と扱いは変わらない。給料はいらぬが、所有者は衣食住を満たす必要があるし、暴行を加えたら普通に傷害や殺人、強姦の罪になる。さらに、服装も自由だから首の紋章　奴隸に刻まれる魔術的な紋章だ。奴隸のランクによって主人の命令に逆らえなくなるを隠す事も出来る。スパイや暗殺を気にする立場の人間が使用人の代わりに買う事が多いね。

2つ目は捕虜奴隸。他国との戦争で捕虜になった兵士や文官、女官だ。それ以外の一般人を捕虜にするのは禁止されている。借金奴隸と大して変わらないが、違いは多少の傷害と、精神的・肉体的に大きなダメージを与えない範囲での性的な行為が認められている。また、服装にも規定があって奴隸紋を隠してはいけない。

3つ目は犯罪奴隷だ。口頭での注意や罰金ですまない犯罪を犯した者、戦争での捕虜の内王族・貴族・騎士、つまり戦争犯罪者として扱われる立場の者、そして犯罪を犯した借金奴隷と捕虜奴隷がなる。奴隷紋を隠す事も許されないし、してはいけない事も無いから男は鉱山や遠洋漁業の使い捨ての労働力に、女はまあそういう事に使われる事が多い。

大体こんな感じだね。勘違いしないで欲しいんだけど、決して人を無理矢理支配して従わせる為の制度じゃないって事だ。金が無い人間が飢え死にしたり物乞いになったりせず最低限の衣食住が守られるように、捕虜が必要以上の虐待を受けないように、犯罪者の再犯を防ぎ、牢屋や衛兵　昔はあったらしい　に金をかけずにすむように。その為に作られた制度なんだ。分かったかな？」

懲役以上の刑は全部奴隷行きなわけか。かなり厳しいけど・・・制度としてはかなりしっかりしてるみたいだな。疑問点は・・・。

「どの国でも全く同じ制度なんですか？」

「ああ。古代王国時代の法がそのまま残っているからね。通貨や言語が基本的に同じなのと同じ理由だ」

「あれ？古代王国の言葉って古代語じゃありませんでしたっけ？」

そっとう知識は無いけど、名前的に他は考えにくいんだが・・・。

「ああ、古代語は古代王国時代の貴族語だよ。話せるのに知らなかったのかい？」

「ははは・・・昔の言葉って認識しかしてませんでした」

「まあ、そんな時代の本はほぼ全部貴族用だから古代語で書かれるしね。・・・他に質問は？」

「えっと・・・あ、さっきいくつか喋れる言葉を聞いてきたのは何ですか？」

確か森妖精語エルフと空妖精語フェザーフォルクと竜語フェアリーと精霊語フェアリーだったよな。

「ああ、あれは全部人気のある異種族の言葉だよ。エルフやフェアリーフォルクは美人が多いし、フェアリーはペットとして人気があるし、ドラゴニュートは亜人ではトップクラスで強いから護衛とかに人気があるしね・・・さすがに本物のドラゴンは滅多に売りに出されないけど。そういう種族を売る時は、色々教え込んだり命令したり、簡単な大陸共通語を教えたりするにも言葉の壁があるからね」

「なるほど・・・ってあれ？そういう異種族ってどうやって奴隷になるんですか？借金したり戦争に参加したりとか想像出来ないんですけど」

「・・・亜人を人間と同じように扱っている国は滅多に無いからね。見つかったら即刻捕まって犯罪奴隷扱いだよ。なにしろ古代王国時代から人間と亜人はずっと戦っているんだ、種族まとめて犯罪者扱いだよ。ちなみに売られる亜人の奴隷の殆どは戦争で捕まった連中だ」

。それはなんと言うか・・・人種差別とかそういう感じがするな・・・

「不愉快かい？」

「えっと、はい、すみません。なんか人間が力に任せて亜人を弾圧してるような気がして」

「別に必ずしもそうではないんだけどね。確かに数は圧倒的に人間が多いけど、個体の強さは亜人が圧倒的だ。実際古代王国が滅びて以降は戦況は一進一退、人間の国同士の戦争もあるからむしろ負けてるぐらいだ。一体のドラゴニートが町1つ滅ぼした、なんて話もあるしね。だから町で「亜人が可哀想」なんて言ったらだめだよ、家族や友人を殺されたなんてのはザラにある話なんだから」

なるほど、どちらかと言うと西洋人と原住民の関係じゃなくて後漢末期の漢民族と異民族の関係に近いな。互いの生活圏の衝突に長年の恨み辛みが重なって互いにどうしようも無くなっているわけだ。

「それじゃあ俺が就職したら亜人の奴隷との通訳の仕事になるんですか？」

「それは君が他に何が出来るか、どんな才能があるかで変わるが・
・例えば計算はどのぐらい出来るかな？」

「四則演算ぐらいなら完璧に出来ますけど」

現代高校生の数学能力は普通に中世の数学者レベルだからな。分野にもよるけど。

「しそくえんざん？」

「ああ、足し算・引き算・掛け算・割り算の事です」

「・・・150万ルドルの犯罪奴隷7人と50万ルドルの借金奴隷3人

を二割五分引きで買ったらいくらになる？」

「えっと・・・900万ドルですね」

7、8秒つてところか。多分九九すらまともに無い時代だろうからかなり速いと思うが・・・。

「・・・ぜひ我がレスキリアン商会に入ってほしい。給料は毎月8万ドルに仕事の出来によるボーナス、秘書に読み書きの出来る美人の借金奴隷、私生活用に容姿の良い犯罪奴隷を付けよう」

「・・・は？」

えっと、つまり月収80万円+ボーナス、美人秘書・愛人付きって事？

「えっと・・・本気ですか？」

「勿論だ。何か不満があるかね？」

「いや、むしろ待遇が良すぎて・・・。何でそこまでして俺を？」

「・・・君は自分の価値が分かっていない。そもそも読み書きが出来るだけでも充分仕事があるんだ。一部の役所やギルドは読み書き出来れば即採用だしね。」

さらに、亜人との交流が壊滅的だから亜人の言語を喋れるなんて滅多にいない。君みたいに五個以上の言語を喋れる人間に至っては大陸中を探しても見つからないだろう。

あまつさえその計算速度、国の財務官でもそんな速く暗算出来るか

は分からない。

はつきり言つてもし君が機会さえ掴めば国の官僚として厚待遇で迎えられる、最終的にはかなりの地位に就いても可笑しくない。だからこそこうして勧誘しているんだ。

宮仕えの欠点は初期の待遇には限度がある事だからそこを圧倒的に勝てる条件でね」

・・・そこまでだとは思わなかった。しかしだとすると・・・。

「なんかエンリコさんの言い方だと国に仕えた方が最終的には得だつて聞こえるんですけど」

「それは一概には言えないよ。官僚組織にも商会にも権力争いはあるから勝ち上がらなきゃどっちにしろダメだし、国の方が出世した時の権力は大きいけどあくまで国内限定だし、万が一戦争で負けたら奴隷にされるしね」

あ・・・そうか、宮仕えだと奴隷の危険性があるのか。すっかり忘れてた。

「じゃあ最後に一つ、レスキリアン商会ってどれぐらいの規模なんですか？正直に言つて部下や護衛の数と奴隷用の檻の大きさや会長自ら買い付けに出てる事が釣り合わない気がするんですよ」

「ああ、今回私が自分で来たのは目的地の町で別の用事があるからだよ。檻が小さいのにも理由があるしね・・・理由はちょっと長くなるから後で話そう。

で、商会の規模だけど、今ちょうど中堅から一流に上がろうとしてるところ、だね。今回の交渉が上手く行けば一流と呼べるだけの権益が手に入るんだ」

「権益ですか？」

「具体的な事は就職してくれるまで言えないよ」

そりゃそうだ。

「じゃあ最後に1つ。もし就職した後で辞めたいって言ったらどうなるんですか？」

「必死に引き留めようとするだろうけど、無理矢理はしない。違法だからね。もっとも辞める時は情報漏洩しない事を魔法契約してもらうけどね」

魔法契約・・・破れなくなるか破ったら被害を受けるんだろう。まあ同然の事だな。

・・・よし、腹は決まった。

「分かりました。レスキリアン商会に入りましょう」

こうして俺は異世界トリップ二日目で就職が決まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7997x/>

異世界にとばされて 商会に就職する話

2011年10月26日02時09分発行